

美術科教育学会通信 No.120 2025 年 10 月 20 日

□巻頭言 □第 48 回東京大会案内（第二次案内） □臨時理事会報告／年会費のクレジットカード決済サービスの開始 □理事会報告 □InSEA 世界大会報告 □論文投稿ランチカフェ予告 □2025 年度リサーチフォーラム報告 □書評 □リサーチフォーラム案内 □本部事務局より

巻頭言 Introduction

学会と事業

Academic Society and Project

副代表理事 大泉義一（早稲田大学）

Deputy Director : Yoshiichi OIZUMI, Waseda University



1. 学会と事業

第13期の事業部担当副代表理事を務めさせていただきます、大泉義一（おおいずみ よしいち）です。12期では直江代表理事のもとで研究部担当副代表理事として、そしてその前の11期では山木代表理事のもとで事業部副代表理事として、本学会の活動に関わらせていただきました。3年ぶりに事業部担当を務めさせていただくことになります。前々期では、コロナ禍における学会活動の推進のために、事業部の先生方と一緒に学会外組織との連携、ホームページの日常的更新作業の整備、そしてリサーチフォーラム・オンラインシリーズの開催等、多岐にわたり取り組んで参りました。

本学会には、大きく「総務部」、「研究部」、そして「事業部」という3つの運営理事組織があります。「総務部」は言うまでもなく学会組織の円滑な運営を司る組織であり、「研究部」は学会活動の本丸である研究活動を推進する組織です。では「事業部」の役割とはどのようなものでしょうか。「美術科教育学会会則」には、次のように定められています。

「第20条(3)事業部は、内外関連学術団体との連絡及び協力、リサーチフォーラムの管理、その他の研究会・講演会等の開催など、学会の広報活動や研究の交流等を促進する事業を行う。」

そもそも、「事業」とは何か。一般的には「生産・営利などの一定の目的を持って継続的に、組織・会社・商店などを経営する仕事。大きく社会に貢献するような仕事」と意味付けられています。またこの「事業」とは、企業的には「Business」と訳されることもありますが、学会の目的から考えるならば「Project」と訳されるのが妥当でしょう。

このようなことから、事業部は、学術研究団体としての使命を持つ本学会の、学会外すなわち社会への学術的な発信や学会内での学術的交流に関する事業を推進する組織であることが分かります。

今期においては、前々期におけるコロナ禍への対応からさらに歩を進め、日常的な学会活動を推進・発展させるために、とりわけリサーチフォーラムをはじめとした学会員による研究活動の推進、そして事業部に位置付く国際局を中心に学会の国際化に力を尽くしていきたいと考えております。さらにその中で、学会内での研究交流、学会外への発信に関する新たな取組の萌芽を展望してゆきたいと考えています。

2. 東京（早稲田）大会に向けて

学会の「事業」を上述したように捉えるならば、年次研究大会の開催もその一つであると言えるでしょう。今年度の第48回大会は、美術教育の学会では史上初となる早稲田大学（東京都新宿区）で開催します。テーマは『美術教育と未来／Art Education and the Future』です。次々頁に第二次案内が掲載されていますが、この紙面もお借りして、今年度の東京（早稲田）大会の事業的な特徴について、ご紹介したいと思います。

（1）多様性有する実行委員会組織

大会会場である早稲田大学で、教員としての学会員は私一人ですので、必然的に大会の企画・運営は様々な方のお力によって取り組んでいく必要があります。すでにそうした工夫は、会場校である一つの大学を超えた協働的な組織化として、これまでの大会で実績がありますので、今大会でもその知見から学びつつ実行委員会を組織しました。今大会の実行委員会は、大学

教員、小中学校教員、NGO 職員、学生といった立場を超えた総勢 23 名の方々によって組織化されています。次々頁にお名前を掲載しています(五十音順・敬称略)。

こうした文字通りの協働性は、これからの学会運営に必須な要件と思われます。ですので、今大会の運営を通じて、学会組織、そして事業運営に対する示唆や知見を得られることを期待しております。

(2) 個性的かつ時期を得た3つの大会企画

今大会では、下記3つの大会企画を計画しています。それぞれ、美術教育の「国際化」、「近未来」、「未来展望」という視角から、個性的な内容を構想中です。これら企画が、先述したような学術的「事業」としての「内」と「外」に対する交流と発信の取組として役割を果たすことが期待されます。

① 国際研究セミナー

国際局とともに、企画を進めております。テーマは、『教育と文化の統合的発展：ユネスコ・フレームワークが示す美術教育の未来戦略』(予定)です。2024 年度2月にユネスコで採択された「文化芸術教育のためのユネスコ・フレームワーク」のコーディネーターをされている Ke Leng 氏(ユネスコ・パリ本部)による講演と、福本謹一先生(元 InSEA 世界評議員/兵庫教育大学名誉教授)、そして会員のみなさんを交えたディスカッションを行う予定です。以下が企画趣旨となります。

ー 2024 年、ユネスコは「文化芸術教育のためのフレームワーク」を採択し、教育と文化の統合的な発展を目指す新たな国際的指針を提示しました。このフレームワークは、創造性、批判的思考、多様性の尊重、持続可能性といった価値を教育の中心に据え、文化芸術教育の役割を再定義しています。本セミナーでは、このユネスコ・フレームワークが示す理念と構造を学び、日本の美術教育が今後どのような方向へ進むべきかを国際的な視座から検討します。

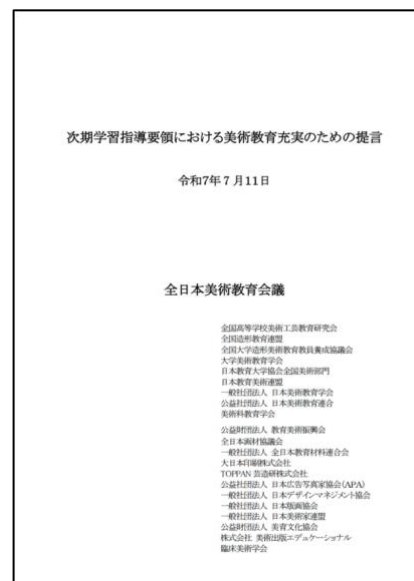
② 全日本美術教育会議と連動したシンポジウム

周知の通り、学習指導要領改訂が迫っている現況において、学術研究団体からの問題提起の機会として、「全日本美術教育会議」と連動したシンポジウムを開催します。本企画は、三澤一実先生(事業部・武蔵野美術大学)が運営されます。「全日本美術教育会議」とは、美術教育に関わる諸学会・団体をまとめて構成された日本の美術教育を代表する全国的な組織です。先日、提言書を提出したことはご存じと思います。

(全日本教育会議：

<https://www.artedu.jp/plugin/bbses/show/25/300/81>)

シンポジウムでは、この提言内容の報告を行い、本学会含めて各参加団体の活動内容と今後の会議に期待することなどを出し合うとともに、文部科学省の小林恭代教科調査官、平田朝一教科調査官も交えてディスカッションする予定です。



「次期学習指導要領における美術教育充実のための提言」

③ 実行委員による未来展望に向けた企画

石賀直之先生(大会実行委員・東京造形大学)による企画です。テーマは『メディアアーティスト×高校生＝未来』。その趣旨は以下の通りです。

ー アルゴリズムや AI が表現に参与する現在、美術教育はそのものの価値について根源的な問いが突き付けられている。その一方でメディアアートはインタラクティブ性やネットワーク性を軸に芸術を鑑賞者や社会全体との関係性の中で捉える局面を迎えている。このような現代において、未来の美術教育は人間存在や創造性の意味を捉え直し、共同的・関係的創造の教育へと拡張していく必要があると考える。今回、新進気鋭のメディアアーティストと美術教育の当事者である現役高校生達と未来の美術教育についてその端緒に触れつつ語り合う。

具体的には、メディアアーティストである佐々木遊太氏(<https://sasaki-sasaki.com/info/yuta/>)の作品を会期中の会場のあちこちに点在させ、未来の美術教育を考えるフックにし、それを基に、佐々木氏、そして美術教育当事者である現役高校生とで、未来の美術教育についてさまざまな角度から体験したり語ったりしていきます。

(3) 無門の門「学ぶ者は拒まず」の地にぜひ!

会場校である早稲田大学の建学の精神は、「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」です。そこから150年近くにわたる教学の歴史を経て「学ぶ者を拒まず」という校風が培われ、その象徴として、大会会場である早稲田キャンパス正門は「無門の門」と呼ばれています。そうした、学問にとって不可欠な自由な風土において、多くのみなさんと研究発表を通じて対話を行い、上記企画で議論を交わし、懇親会で交流できることを心から願っています。

詳しくは、次頁の第二次案内をご覧ください。

第48回 東京(早稲田)大会案内 (第二次案内)

Notice of the 48th Conference in Tokyo (Waseda) : Details about the Conference

第48回 美術科教育学会 東京(早稲田)大会

大会実行委員長 大泉義一(早稲田大学) 大会事務局長 畑山未央(植草学園大学)

大会テーマ 美術教育と未来

2026(令和8)年3月14日(土)・15日(日) 早稲田大学 早稲田キャンパス

東京(早稲田)大会 Web サイトをオープンいたしました。情報は随時追加・更新してまいります。

<https://sites.google.com/view/jaaedresearchconference48th/home>

VUCAと言われる現代においては、これまで以上に未来を展望する教育が求められています。一方で、未来を展望すること自体が困難であることも指摘される中で、空想の領域を含めた「起こりうる」未来を想像し、そこから逆算的に「望ましい」未来を展望する必要があるとも言われています。ここに、美術教育の可能性を見出すことができるのではないのでしょうか。

学会の中心活動である研究が、それまで明らかでなかったことを明らかにするという営みであるとするならば、それは未来への投企・問題提起そのものであると言えます。すなわち、本大会のあらゆる場面や機会には「未来」が散りばめられているのです。本大会に集うみなさんは必然的に「未来」と向き合うことになるでしょう。

皆様と美術教育を通じて未来について考えあうために、早稲田で初の美術教育の学会へのご参加と口頭研究発表へのご登録を、実行委員会一同、心よりお待ち申し上げます。

第48回 美術科教育学会 東京(早稲田)大会 実行委員会

実行委員長 大泉義一 事務局長 畑山未央

実行委員 栗津謙吾 石賀直之 オウ・シュウディ 大江昭子 海沼恭史 笠原広一 佐翔南 高橋文子
立川泰史 直江俊雄 中川知子 中村和世 名達英詔 長谷川聡 東村ほのか 堀田英子
前沢知子 牧野由理 三澤一実 守屋建 廖曦彤

■ 主催 美術科教育学会

■ 会期 2026(令和8)年3月14日(土)、15日(日)

■ 会場 早稲田大学 早稲田キャンパス (〒169-8050 新宿区西早稲田 1-6-1)

- ・大会受付: 教育学部・社会科学部棟 14号館 1階ロビー
- ・口頭発表会場: 教育学部・社会科学部棟 14号館各教室
- ・【大会企画Ⅰ】シンポジウム(1日目): 14号館 201教室
- ・【大会企画Ⅱ】シンポジウム(2日目): 小野梓記念講堂
- ・【大会企画Ⅲ】プロジェクト(2日目): 14号館教室とロビー



大会ホームページ

■ 懇親会日程 2026(令和8)年3月14日(土) 18:40~20:40 大隈ガーデンハウス 2階

■ 理事会日程 2026(令和8)年3月13日(金) 午後 教育学部・社会科学部棟 14号館 教室未定

■ 開会行事、総会 2026(令和8)年3月14日(土) 13:20~14:10 14号館 201教室

■ 後援 国際美術教育学会 InSEA, 東京都教育委員会(申請準備中), 新宿区教育委員会(申請準備中)

■ 共催 早稲田大学 教育・総合科学学術院

■ 参加登録(参加申込み)・演題登録(口頭発表申込み)の期間について

発表者の参加登録の申込み期間は、2025年11月1日(土)0時00分から2026年1月10日(土)23時59分までです。演題登録は、2025年11月1日(土)0時00分から2026年1月10日(土)23時59分までです。

参加者の参加登録の事前申込み期間は、2025年11月1日(土)0時00分から2026年3月7日(土)23時59分までです。事前申込み期間後も大会当日まで参加を受け付けますが、事前申込み期間後は参加費の金額が変更になりますので、ご注意ください。

■ 大会までのスケジュール

(1) 発表者のスケジュール

参加登録期間（参加費納入期間）	2025 年 11 月 1 日（土）～2026 年 1 月 10 日（土）
演題登録期間	2025 年 11 月 1 日（土）～2026 年 1 月 10 日（土）
発表概要集原稿 提出期間	2025 年 11 月 1 日（土）～2026 年 1 月 24 日（土）
大会 Web サイトでの発表プログラムの公開	2026 年 2 月 14 日（土） 予定

(2) 参加者のスケジュール

参加登録期間（事前申込み）※印字名札をお渡し	2025 年 11 月 1 日（土）～2026 年 3 月 7 日（土）
大会 Web サイトでの発表プログラムの公開	2026 年 2 月 14 日（土） 予定
参加登録期間（事前申込み期間後）※名札は自署	2026 年 3 月 8 日（日）～2026 年 3 月 15 日（日）

■ 大会参加費・懇親会参加費

	大会参加費		懇親会費	
	事前申込み (11/1～3/7)	3/8 以降の申込み (3/8～大会当日)	事前申込み (11/1～3/7)	3/8 以降の申込み (3/8～大会当日)
支払い方法	Peatix	Peatix	Peatix	Peatix
正会員 ^{※1}	4,500 円	5,000 円	6,000 円	7,000 円
会員以外（一般）	5,500 円	6,000 円	6,000 円	7,000 円
学生会員 ^{※2}	2,500 円	3,000 円	4,000 円	5,000 円

^{※1}「大学美術教育学会」または「日本美術教育学会」または「国際美術教育学会：International Society for Education through Art, InSEA」の会員は、本学会会員と同様に、正会員の料金で参加することができます。

^{※2}「学生会員」は、本学会に「学生会員」として登録済みの会員のことを指しています。なお「学生会員」に該当している方は、在職の有無は問わず、「学生会員」の料金でご参加いただけます。それ以外の学部生・大学院生、聴講生、研究生、科目等履修生は「正会員」「会員以外(一般)」のどちらか該当する方となります。

■ 参加登録・演題登録などの申込み方法

本大会の申込み種別は、「①大会参加登録（大会参加申込み）」「②演題登録（口頭発表申込み）」「③懇親会申込み」「④大会企画の参加申込み」の4種類です。なお、「④大会企画」は、大会の参加に関わらず、広く一般に無料で公開します。（※なお、①で申込んだ方は、新たに④に申込みする必要はありません。）

「①大会参加登録（大会参加申込み）」「③懇親会申込み」「④大会企画の参加申込み」は、東京（早稲田）大会 Web サイトからリンク先の Peatix を開いて参加申込みを行い、「①大会参加登録（大会参加申込み）」と「③懇親会申込み」については併せて参加費の支払いを行ってください。クレジットカード払、コンビニ払、ATM 払に対応可能です。「②演題登録（口頭発表申込み）」は「①大会参加登録」の手続きが済んだ後、東京（早稲田）大会 Web サイトから登録フォームへのリンク先をクリックして登録フォームの画面上から行なってください。

■ 演題登録（口頭発表申込み）の注意点

- ・「②演題登録」をされる方は、申込み時に「①大会参加登録」で納金手続きが完了した際に画面表示される番号が必要となります。前もって「①大会参加登録」を済ませ、発行された番号を記録しておいてください。
- ・「②の演題登録」の手続き完了時に、概要集の原稿の形式や送付先等をお伝えします。
- ・複数人で共同発表を行う場合は、筆頭発表者が演題登録を行ってください。筆頭発表者は、共同発表者が大会参加登録と参加費支払いを済ませたことを確認し、発表者全員分のチケット番号と学会の会員番号(会員のみに)を演題登録の際に記入してください。
- ・「①大会参加登録」及び「③懇親会参加申込み」は、大会当日の受付を含め、現金ではなく、Peatix での決済をお願い致します。どうしても手続きが難しい場合は、大会実行委員にお問い合わせください。

■ 口頭発表について

(1) 発表資格

発表は、本学会会員（申し込み時点で、当該年度までの会費を完納していること）が筆頭発表者として出席できる条件です。共同研究の場合は、筆頭発表者が会員であれば、そのほかに何名でも発表資格を有する共同研究者として認められます。なお、発表者は全員、参加登録と参加費納入が必要です。

(2) 発表時間 30 分（発表 20 分、質疑 10 分）

各研究発表の日時、会場についてはホームページでお知らせします（2026 年 2 月 14 日予定）。

(3) 使用機器

発表にパソコンやタブレット等を使用する場合は、各自で持参してください。プロジェクターへの接続は HDMI が基本となります。Mac, iPad 等の接続は各自変換アダプターを用意してください。プロジェクターへの接続を通し、パワーポイント等で音声（音声つき動画を含む）を流すことを希望される方は、「②演題登録」の際に投稿フォームの専用欄からその旨をお伝えください。

■ 会場までのアクセス

早稲田大学ホームページ、東京（早稲田）大会ホームページ等でご確認ください。

■ 宿泊に関して

宿泊施設の確保・斡旋は行っておりません。各自で早めのご予約をお願いいたします。

■ 昼食について

東京（早稲田）大会ホームページにて、早稲田大学近隣の飲食店マップを公開しています。ご参考のうえ、各自でご利用をお願いします。なお、今大会では、参加者用のお弁当の申込みは行いません。

■ 大会日程（暫定）

【1日目】2026年3月14日（土）9:30～18:20		
9:00～	受付	14号館1階ロビー
9:30～12:20	口頭研究発表 ① 9:30～10:00 ② 10:05～10:35 ③ 10:40～11:10 ④ 11:15～11:45 ⑤ 11:50～12:20	14号館各教室
12:20～13:20	昼休憩 / 論文投稿ランチカフェ	
13:20～14:10	開会行事 / 総会	14号館201教室
14:10～16:40	【大会企画Ⅰ】国際研究セミナー 「文化芸術教育のためのユネスコ・フレームワーク」のコーディネーターをされている KeLeng 氏による講演と参加者を交えたディスカッションを行う（同時通訳）	
16:50～18:20	研究部会（5会場）	14号館各教室
18:40～20:40	懇親会・表彰式（18:20 受付 18:40 開始）	大隈ガーデンハウス2階

【2日目】2026年3月15日（日）9:30～17:30		
9:00～	受付	小野梓記念講堂ロビー
9:30～12:00	【大会企画Ⅱ】学術研究団体と全日本美術教育会議 学習指導要領改訂が迫る中において、学術研究団体からの問題提起をもとにしたディスカッションを行う（小林恭代教科調査官、平田朝一教科調査官を交えて）	小野梓記念講堂
12:00～13:00	昼休憩	
13:00～17:30	口頭研究発表 ① 13:00～13:30 ② 13:35～14:05 ③ 14:10～14:40 ④ 14:45～15:15 ⑤ 15:20～15:50 ⑥ 15:55～16:25 ⑦ 17:00～17:30	14号館各教室
13:00～17:30のうち2時間（予定）	【大会企画Ⅲ】メディアアーティスト×高校生＝未来 会場の空間にメディアアーティスト、佐々木遊太氏の作品を展示し、佐々木氏と参加者、ならびに美術教育受益当事者である現役高校生とで、「未来」「教育」等に関するテーマについてディスカッションを行う	14号館教室 学内の空間

■ 問い合わせ先

東京（早稲田）大会実行委員会事務局 jaaed1978@gmail.com

大会実行委員長 大泉 義一（早稲田大学） Tel. 03-3208-1703

事務局長 畑山 未央（植草学園大学） Tel. 043-233-9306

2025 年度 第 1 回臨時理事会報告／ 年会費のクレジットカード決済サービスの開始について

Report on the Board of Directors Meeting for the Fiscal Year 2025／

Launch of Credit Card Payment Service for Annual Fees

本部事務局 竹内晋平（奈良教育大学）

1. 2025 年度 第 1 回臨時理事会報告

● 提案内容

2025 年度より学会年会費のクレジットカード決済を下記の趣旨・方法等により導入する（導入に伴う手数料は学会が負担する）。

【趣旨】

- ・現代社会に即して会員の利便性向上
- ・国外会員の会費納入を容易に

【方法】

- ・ガリレオ社を経由してオンラインで決済
- ・郵便振替による納入も継続
- ・2025 年度年会費の支払い分より開始

● 審議方法： フォームによる審議

● 審議期間： 2025 年 5 月 30 日（金）～ 6 月 5 日（木）

● 審議結果： 賛成多数による承認

2. 年会費のクレジットカード決済サービスの開始について

上記のとおり臨時理事会の議を経て、本学会の年会費を支払う際のクレジットカード決済サービスが開始されました。本学会 Web サイトのトップページから「JAAEd 会員」のタブをクリックしていただき、その先のページを下にスクロールしていただきますと、下記の画面になります（<https://www.artedu.jp/jaaed>）。

年会費支払い方法 Annual Membership Fee Payment

会員資格の有効期間は、年会費の払込日にかかわらず、4月から翌年の3月です。

◆【クレジットカード】 Credit Card Payment

下記のオンラインクレジット決済をクリックしてください。SOLTIの年会費オンライン決済システムよりお支払いいただけます。

※2025年7月1日(火) 正午より受付開始※

▶オンラインクレジット決済◀

・クレジットカード決済手数料は学会が負担します。
・ご利用クレジットカードは、年会費をお支払いになるご本人と同一名義のものをご使用ください。

この画面中央の「▶オンラインクレジット決済◀」をクリックしていただきますと、ガリレオ社（本部事務局支局）が提供する SOLTI を利用した年会費の Online Credit 決済システムに移動します（会員 ID とパスワードが必要です）。なお、クレジットカード保有者以外の方がお支払いにご利用する事は出来ません。ご利用クレジットカードは、年会費をお支払いになるご本人と同一名義のものをご使用ください。

年会費のお支払いにはクレジットカード決済のほか、従来どおりの払込取扱票を使用した送金も引き続きご利用いただけます（ゆうちょ銀行の払込料金は会員負担）。同年度に二重の送金とならないようご注意ください。

※ 本決済サービスの操作等に関してご不明の点がある場合は、本部事務局支局（g030aee-support@ml.gakkai.ne.jp）までお問い合わせください。

2025 年度 第 1 回理事会報告

Report on the Board of Directors Meeting for the Fiscal Year 2025

本部事務局 渡邊美香（大阪教育大学）

2025 年度第 1 回理事会は、2025 年 9 月 6 日（土）13 時 00 分からオンライン（Zoom）にて開催された。最初に佐藤賢司代表理事の挨拶があり、続いて竹内晋平副代表理事を議長として議事が進められた。なお、出席した理事は 22 名、委任状提出 2 名の計 24 名であり、理事会成立条件が満たされていることが確認された。また東京大会実行委員として畑山未央委員が同席した。理事会終了は 17 時 00 分であった。



理事会の様子

【審議事項】

I 代表理事より

1. 『美術教育学』賞の今後の在り方の検討について

佐藤代表理事より、研究部と正副代表理事を中心に原案を作成し次回理事会で提案し審議するという取り運びの提案があった。審議の結果、原案通り承認された。

2. 会員の表彰について

会員からの表彰の自薦に関する問い合わせについて、代表理事、副代表理事を中心に回答原案を作成し、臨時理事会にて審議する旨提案があった。審議の結果、承認された。また、賞による研究推進の観点から新たな美術教育の実践に対する推薦賞について検討したいという意見も出された。

II 総務部関連

1. 第 48 回美術科教育学会東京（早稲田）大会の実施について

大泉義一副代表理事より、資料に基づき、まず、第 48 回美術科教育学会東京（早稲田）大会の実施計画案について説明がなされた。大会テーマ：「美術教育と未来」、大会ホームページの開設、参加費、3つの大会企画（国際局企画国際研究セミナー、全日本美術教育会議企画、実行委員会企画）、実行委員会組織について提案があった。次に、畑山委員より、大会申し込み方法として継続的に使用できる学会 Peatix の開設と東京大会での運用について説明があり、東京大会をきっかけに今後の全国大会での Peatix の継続運用について検討をはじめの旨提案がなされた。審議の結果、いずれも承認された。さらに、三学会共通参加費の運用については、東京（早稲田）大会ではこれまでの慣例と実践に基づいた運用を行うこと、そして同参加費に関する規約化については三学会連携協議会の場で検討することについて提案があり、審議の結果、承認された。

2. 第 47 回美術科教育学会岡山大会の大会報告および収支決算報告について

赤木里香子理事より、第 47 回美術科教育学会岡山大会の大会報告を日本教育学会刊行『教育学研究』の関連学会大会報告頁に掲載すること、岡山大会以降も掲載を継続することについて資料を基に提案がなされた。本報告は、教育関連学会連絡協議会の加盟学会が行うもので、大会直後に原稿提出がある旨説明があった。審議の結果、承認された。次に、収支決算案について資料を基に説明があり、原案通り承認された。

3. 2025 年度第 2 回理事会・総会の開催時期及び開催方法について

竹内副代表理事より第 2 回理事会は 2026 年 3 月 13 日（金）対面のみで開催予定であること、総会は 3 月 14 日（土）対面にて開催（委任状はウェブ提出）予定であることについて説明がなされた。あわせて今期理事会では、第 1 回理事会についてはオンラインでの開催とすること、第 2 回理事会については対面のみでの開催とすることについて審議の結果、承認された。

4. 新入会員及び退会者の承認について

渡邊美香理事より資料に基づき、16 名の新入会員申込者および 12 名の退会・退会予定者について説明がなされた。審議の結果、原案通り承認された。2025 年 8 月末での正会員数は 591 名、学生会員は 39 名、賛助会員 4 団体、会員数は計 630 名となった。

5. ガリレオ社からの業務委託料金改定依頼について

竹内副代表理事より、資料に基づき、ガリレオ社より依頼がなされた 2026 年 4 月以降の業務委託料金の改定（値上げ）について説明があった。本部事務局で対応を検討し次回理事会で報告する旨承認された。

6. 学会ウェブサイトにおける日本語・英語ページの連携について

佐藤代表理事より、資料を基に学会ウェブサイト英語ページ作成の経緯説明があり、その後手塚千尋理事より日本語・英語ページを連携させるためのページデザイン及び今後の取り扱いについて提案があった。原案通り承認された。

7. 細則の改定について

中村和世理事より、資料に基づき国際研究セミナー設置に伴う細則の改定（第八章 国際研究セミナーに関する規則）について提案があった。審議の結果、承認された。その際、同セミナーに伴う費用の財源についても確認がなされた。

●細則改定箇所（第八章の追加）

現行	改定後
	第八章 国際研究セミナーに関する規則 第 27 条 国際研究セミナーとは、大会において、大会校もしくは会員の発議に基づき、理事会（事業部）の管理下において、会員独自にあるいは事業部・国際局と連携・協力して行うセミナー等をいう。 第 28 条 国際研究セミナーは、海外からの研究者等の招聘を通じて、学術的研究についての協議等を行い、国際交流を深め、美術教育の振興を図ることを目的とする。 第 29 条 大会校もしくは会員が、国際研究セミナーを開催することを希望する場合は、所定の形式に基づく企画書と国際研究セミナー概算書を事業部担当副代表理事に提出し、開催のための運営補助費を伴う認定を受けるものとする。 2 同一の申請者または責任者による国際研究セミナーは、大会において原則として 1 件とする。 3 企画書について、以下の項目について必要事項を記載するものとする。 ① 当該国際研究セミナーの名称（原則として「〇〇〇〇〔西暦〕年度 美術科教育学会国際研究セミナー『〇〇〇〇』」（テーマ等）とする） ② 開催希望日時（開催の年月日） ③ 開催の趣旨・海外招聘者の選定理由など ④ 登壇者の氏名と所属 ⑤ 企画・運営責任者名（申請者が同時に企画・運営責任者であることも可）と連絡先メールアドレス ⑥ 必要経費総額 ⑦ 事業部、本部事務局、国際局に協力依頼したい内容 ⑧ 申請者氏名と所属並びに連絡先・メールアドレス ⑨ 申請日 第 30 条 事業部は国際局と協力のもと、大会校もしくは会員から国際研究セミナーを開催したい旨の申請があった場合、その内容が国際研究セミナーの目的に照らして適切かどうかを審査するものとする。 2 申請内容が適切であると認められた場合、当初予算の範囲内で運営費等の補助を行うものとする。 3 補助金を支給する国際研究セミナーは、大会において 2 件までを上限とし、申請順に審査・認定するものとする。 4 開催に伴う補助は、2 件合わせて原則 250,000 円までとする。 5 補助金の使途については、別に定める「国際研究セミナー補助金の使途に関する規則」に基づくものとする。 第 31 条 国際研究セミナーの申請及び認定の手続きについては以下の通りとする。 (1) 申請者は国際研究セミナーの企画書を、原則として開催予定年度の 7 月末までに事業部担当副代表理事及び本部事務局に提出する。

	(2) 事業部担当副代表理事は、国際局の協力のもと、企画書の内容について審査し、認定の可否を原則として申請後2週間以内に申請者に通知する。 第32条 国際研究セミナーについては、終了後、2ヶ月以内にその成果を所定の形式に基づき、事業部担当副代表理事及び本部事務局に報告するものとする。なお、企画・運営責任者は、上記の成果報告書および関連資料を美術科教育学会の公式サイトにおいて公開することについて、あらかじめ当該国際研究セミナーに参画した全員の了解を得るとともに、報告書および関連資料の内容について責任を持つこととする。
第八章 その他 (賞の授与) 第27条 本会では、特に必要と認められた場合、総会の承認をうけ、会員への授与を目的とする賞を設けることができる。	第九章 その他 (賞の授与) 第33条 本会では、特に必要と認められた場合、総会の承認をうけ、会員への授与を目的とする賞を設けることができる。

8. 叢書企画編集委員会・3年間の刊行計画

宇田秀士叢書企画編集委員長（理事）より、資料に基づき今期の叢書（第6，7号）刊行計画の概要及び責任編集者について説明があった。第6号の内容構成と執筆者の選定については叢書企画編集委員会に一任する旨を審議した結果、承認された。

III 研究部関連

1. 学会誌第47号の査読体制ならびに査読の観点について

理事会開催前（9月6日午前中）に開催された学会誌編集委員会での審議に基づき、池田史志副代表理事より投稿論文の受理、査読体制、論説についての査読の観点、査読要領についての説明・提案がなされた。査読要領の文言の修正については編集委員長、副委員長に一任することとし、審議した結果、原案通り承認された。

2. 東京大会での「論文投稿カフェ」開催について

池田副代表理事より、資料を基に東京大会での論文投稿カフェの開催日程、概要について説明・提案があり、審議の結果、承認された。

3. 令和7年度第23回『美術教育学』賞選考について

『美術教育学』賞選考委員長として西村德行理事より、以下選考委員（敬称略）を推薦したことについて説明・提案がなされ、承認された。

ア号委員…西村德行（選考委員長） イ号委員…佐藤賢司（代表理事） ウ号委員…池田史志（学会誌編集委員長） エ号委員…郡司明子，藤井康子（選考委員長推薦の理事） オ号委員…柳沼宏寿，佐藤真帆（学会誌編集委員長推薦の会員）

IV 事業部関連

1. 第13期国際局委員の推薦

中村理事より、資料をもとに新たな国際局委員として、片桐彩会員，家崎萌会員，新井馨会員，吉田奈穂子会員の推薦について提案があり、審議の結果、承認された。

2. 国際研究セミナー事業募集要項（案）について

中村理事より、資料を基に、大会での開催を基本とした国際セミナー事業の募集要項案について提案があり、審議を図ったところ承認された。本セミナーの大会時以外での開催については今後の検討課題とした。

3. 美術科教育学会東京大会での国際研究セミナーの概算経費

中村理事より、東京大会第1日目に実施予定の国際研究セミナーの内容について説明があり、それにかかる諸経費について審議を図ったところ、承認された。

【報告事項】

I 総務部関連

1. 会費納入状況、学生会員について

内田裕子理事より、資料に基づき8月20日現在、2025年会計年度の学会費を納入している正会員は77.6%であること、滞納者一覧、正会員から2名の学生会員移行申請があったことについて説明がなされた。

2. 学会通信 No. 120 の編集について

佐藤絵里子理事より、資料を基に次号『学会通信』の割付について報告があった。次号には間に合わないが、書評、新刊案内、理事通信の希望がある場合は、佐藤理事に知らせる旨確認した。

3. 学会ウェブサイト及び学会通信における英語表記の統一について

佐藤理事より、学会通信で使用されている英語表記とウェブサイトの英語表記について対照表を作成の上、統一させた旨報告があった。佐藤代表理事より、これまで、英語訳に協力いただいた理事への感謝が伝えられた。

4. 学会 HP 保守業務の契約更新及び学会 HP ドメイン使用料更新について

手塚理事より、例年通り更新手続きを行ったことが報告された。また、学会ホームページのドメインについては単年度契約で更新しており、支払いを済ませたことについて報告があった。

5. 令和 8 年度第 49 回大会について

佐藤代表理事より、大分大学を中心としたチームでの九州大会の開催を藤井康子理事に担当いただく旨報告があった。また、藤井理事より大分大学での開催に向け準備をはじめていることについて説明があった。

6. 叢書販売報告

宇田叢書企画編集委員長より、資料を基に 2025 年前期叢書の販売実績について報告があった。また、広報の方法についても提案があった。

II 研究部関連

1. 学会誌の J-Stage への掲載について

藤井理事より、郡司明子理事と共に行った『美術教育学』第 46 号の J-Stage 公開のための業務について報告があった。掲載論文内容の確認、文献引用リストの修正依頼（小野高速印刷）、相互チェックを経て、6 月 28 日に『美術教育学』第 46 号の J-Stage への公開がなされた。業者への支払い等も含め無事終了した。

2. 学会誌の EBSCO ホストへの収録について

池田副代表理事より、資料を基に 2025 年 6 月 9 日に EBSCO ホストとの契約が無事なされたことが報告された。第 47 号から収録されることが伝えられた。

III 事業部関連

1. 教育関連学会連絡協議会

大泉副代表理事より、丁子かおる理事の代理として以下が伝えられた。協議会総会が 3 月 14 日開催で東京大会と重なるため出席を検討中であること、本会の 2024 年度大会報告 2025 年度大会開催予告がホームページに掲載されていること、「日本学術会議法案」の廃案を求める声明もホームページで公表していること。本件に関連し、山木朝彦理事より、美術科教育学会での日本学術会議の要望書に関する支持表明について、学会通信 106 号にて確認いただきたい旨参考意見があった。

2. 8 団体連携会議

三澤一実理事より、資料を基に 7 月 11 日に全国美術教育会議（22 団体）でまとめた「次期学習指導要領における美術教育充実のための提言」を文化庁に提出したことが報告された。報告書は冊子として印刷したこと、提出時に文化庁次官から出された課題について東京（早稲田）大会企画において検討していくことが伝えられた。またこれらの内容については、学会ホームページで紹介している。

3. リサーチフォーラムの運営

大泉副代表理事より、開催済みの 2 件、今後開催 2 件の概要について報告があった。開催済みの 2 件は共に盛況に終わり、学会通信に報告を掲載する予定であることについて北野諒理事、栗津謙吾理事より報告があった。例年 3 件のところ 4 件の開催となったことから、次年度以降の予算拡大の検討について意見があった。

4. 国際局からの報告事項

中村理事より、国際研究セミナー補助金の使途に関する申し合わせの作成および、年次報告書を InSEA 事務局に 6 月に提出した旨報告があった。直江俊雄理事より、大会での英語発表枠の設定と国外会員の参加促進に向けて準備を進めているとの報告があった。

38th InSEA World Congress 報告 Report of the 38th InSEA World Congress

国際局：中村和世（広島大学） 渡邊美香（大阪教育大学） 佐藤真帆（千葉大学）

片桐彩（InSEA 世界評議員，女子美術大学） 新井馨（西九州大学） 家崎萌（鳴門教育大学） 吉田奈穂子（筑波大学）

第 38 回 InSEA 世界会議が、2025 年 7 月 21 日から 25 日までチェコ共和国オロモウツで開催されました。チェコでの開催は、プラハで行われた第 18 回 InSEA 世界会議以来、約 60 年ぶりとなります。InSEA とチェコ InSEA 支部が主催し、組織・運営はチェコで 2 番目に古いパラツキー大学オロモウツ校の教育学部と美術教育学科が中心となりました。大会テーマには「予期せぬ領域，変化する基盤，そして美術教育における永続性（Unexpected Territories, Shifting Grounds and Permanence in Art Education）」が設定され、急速

な環境変化や技術革新などで不確実性や複雑性が増す今日において、美術教育が扱う領域のイメージ概念を捉え直し、新しい可能性を再想像し、これからどのようにナビゲートしていくかを協議する場となることが目指されました。「予期せぬ領域」はイメージ概念であり、アイデンティティ，文化，知識構築のための思考や感情の働きの空間であり、永続性や安定性を保持する一方で、変容や流動性があり、探究の核心として捉えられています。この世界会議の開催に際して、InSEA 会長であるグレン・クーツ教授は、「この集いは単なる意見交換の場を超え、私たちのグローバルなコミュニティの祝典であり、精神の再結集であり、共有する目的である『文化，世代，地理を越えて美術を通じた教育を推進する』の再確認です。・・・本会議のテーマ『予期せぬ領域』は、私たちに既知の領域を超え、学問の境界，国家の枠組み，教育や研究の慣れた領域を越えて旅立つことを促します」と述べ、美術と教育は、表現・対処・生存するためのツールだけでなく、理解・代替案の想像・変革のためのツールであることが強調されました。

発表は、論文発表（対面，オンライン），パネルディスカッション，ワークショップ，ポスター発表，美術プロジェクト発表（オンライン），美術展示会（オンライン）の多様な形式で行われ、論文発表は次の 8 つのテーマのもと、各国からの最新研究が共有されました。テーマ 1：アート教育における予期せぬ領域。テーマ 2：アートとして予期せぬ領域への招待。テーマ 3：美術館とギャラリー：アートを通じた教育の領域。テーマ 4：アート教育として包摂的な領域。テーマ 5：デジタルメディア：新たな領域への道筋。テーマ 6：集団的な領域—メディア間性と学際性。テーマ 7：再発見された領域としての歴史と伝統。テーマ 8：変化する基盤—議論の変化とそのアート教育への反映。50 カ国以上から 600 人を超える参加者と 457 件の発表件数があり、そのうち、日本人による発表件数は全体の約 7 パーセントを占める 34 件でした。

主な会議会場となったパラツキー大学オロモウツ校は、450 年以上も前に設立された歴史的建造物であり、フレスコ画や教会装飾が残る趣深い部屋で、口頭発表や展示発表が行われました。一方



写真 1. 第 38 回 InSEA 世界会議の公式 HP より



写真 2. 第 38 回 InSEA 世界会議の組織・運営を担ったパラツキー大学オロモウツ校のヤナ・ジロウトヴァ准教授とペトラ・ショパニョヴァー准教授のオープニングセレモニーでのスピーチの様子。スクリーンに参加者の意見がリアルタイムに投影されている。

で、この会議は、デジタルプラットフォーム「Claimed Territories」を設けて、発表者と参加者がイベント前、中、後でコミュニケーションを継続的に取れるようにするなど協働と知識共有を促進する新しい方法が取られていました。オープニングセレモニーでは、「美術教育の役割を一言で表すと？」という問いに対し、代表者が自ら意見を示すのではなく、リアルタイムに参加者の意見を反映させられるアプリを活用し、スクリーンに映し出すなど(写真2)、まさに「予期せぬ領域」をその場で体験を通して実感できる新しい形態で進められました。

ポスター発表では、発表者と聴衆の間で柔軟な対話が可能となり、チェコはもとより他国の研究者との質疑応答を通じて、教育課題を共有することができる活発な交流が行われていました。ワークショップでは、墨アートやフェルト制作、嗅覚を用いた創作などが行われ、参加者同士の交流が深められていました。InSEA が発行している *International VISUAL JOURNAL for Art Education* (国際美術教育ビジュアル・ジャーナル) に関わるワークショップでは、次号テーマに基づく編集プロセスを体験する活動も行われました。最終日には、文化ツアーが組み入れられ、チェコの美術文化に触れる機会が提供されました。

今回の第38回 InSEA 世界会議は、単なる学術的な発表の場を超え、参加者一人ひとりが「予期せぬ領域」に足を踏み入れ、自己の教育実践や研究を再構築する契機となる貴重な体験の場でした。特に、歴史的建造物とデジタルプラットフォームの融合、リアルタイムな参加型セッション、そして多様なワークショップは、美術教育が持つ柔軟性と包摂性を体現していました。また、日本からの参加者による発表が全体の約7%を占めたことは、国際的な美術教育の場における日本の存在感と貢献を示すものであり、今後さらに多様な視点や実践が共有されることが期待されます。「予期せぬ領域」というテーマは、現代の教育が直面する不確実性や複雑性に対して、美術教育がどのように応答し得るかを問い直すものであり、教育者としての創造性と柔軟性が求められる時代において、非常に示唆に富んだものでした。この会議を通じて得られた知見と交流は、今後の教育実践において新たな視座を提供してくれることでしょう。

次の InSEA 世界会議に関する情報は、InSEA の HP に掲載される予定ですので、興味のある会員の皆様は、公式サイト (<https://www.insea.org/>) からご確認などお願いいたします。

※ この報告の作成にあたっては、第38回 InSEA 世界会議・共同実行委員長であるヤナ・ジロウトヴァ准教授(パラツキー大学オロモウツ校)にご協力いただきましたことを感謝申し上げます。



写真3. 発表会場として用いられたパラツキー大学オロモウツ校の中にある
コーパス・クリスティ礼拝堂。歴史的建造物であり、オロモウツで
最も古く、最も多くの訪問者が訪れる場所の一つ。



写真4. ワークショップの様子



写真5. ポスター発表の様子

東京(早稲田)大会の第一日目(3月14日(土))に [論文投稿ランチカフェ] を開催します。

研究部担当副代表理事 池田吏志 (広島大学)

本学会誌『美術教育学』は、これまで46号を刊行し、美術教育の学術面を支え促進してきました。

この度、学会誌編集委員会の企画として、2026年3月に開催される第48回美術科教育学会東京(早稲田)大会において、下記の通り学会誌への投稿をテーマにした「論文投稿ランチカフェ」を開催いたします。

大会一日目の昼休みに、持参されたランチをとりながらご参加いただけます。どうぞお気軽にご参加ください。

- ▶ 開催日時 東京(早稲田)大会第一日目 2026年3月14日(土)の昼休み(12:20~13:20)
- ▶ 会場 東京大会会場教室(「研究概要集」でお知らせします)
- ▶ 内容(予定)
 - (1) 学会誌投稿のポイント
 - ・投稿手順の実際などの基本事項と見逃しがちな留意点などの説明
 - ・学会誌の書式について
 - (2) 論文掲載著者による体験談・アドバイス
 - ・石黒千晶 先生(東京大学 教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター、大学総合教育研究センター兼任 准教授) 石黒千晶, 夏川真里奈, 岡田猛「表現や創造を触発するオンラインアートワークショップの開発と評価」(教育システム情報学会誌, 2022年, Vol. 39, No. 3) など
 - ・村田透 先生(滋賀大学 教育学部, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 兼職, 教授)『『造形遊び』における子どもの探究について—矛盾の構築と表現世界の形成過程との関係性』(美術教育学, 2020年, 第41号) など
 - (3) 質疑応答
- ▶ 司会進行 清田哲男, 村田透

リサーチフォーラム in 東京・成城 Research Forum in Tokyo・Seijo

授業から見つめ直す“造形遊び”の現在地

栗津謙吾（成城学園初等学校）

2025 年 7 月 19 日（土）、成城学園初等学校にて美術科教育学会リサーチフォーラムを開催した。対面参加 50 名、オンライン参加 46 名、運営を含めると約 100 名を超える参加を得て実施となった。

本フォーラムは、1977 年の学習指導要領改訂で初めて位置づけられた「造形的な遊び」が、教育現場においてどのように受け継がれ、変化し、今日の授業に結びついているかを問い直すことを目的とした。公開授業を通して「造形遊び」の教育的意義を再考し、教材構成・環境設定・教師のかかわり方などの観点から、実践と理論の接続を図ることをめざした。なお、当日配付資料および講演の要約については、QR コード（図 1）からも確認いただけるよう準備している。

当日は、子どもと教師による造形遊びの授業を 2 本公開した後、村田透氏による歴史的整理から現在の造形遊びの位置づけを確認し、山野井誠氏による「これからの造形遊び」に関する講演を行った。最後に授業者・スピーカー・参加者によるディスカッションを通じて、「造形遊び」の理論的・実践的意義を再考する機会となった。

以下、各パートの報告については各担当が記す。

（1）授業Ⅰ 河村泰正（練馬区立豊玉第二小学校）

授業Ⅰでは、カラフルスティック（色を付けた割箸）を用い、並べたり積んだりして思い付いたことを表す活動を行った。材料を並べて絵や模様のように構成したり、積み上げて立体にしたりしながら、子どもたちは夢中になって表現を楽しんでいた。活動が進むにつれ、自然と友達と繋げたり鑑賞したりする姿も見られた。授業の最後には、男子数名が大量に材料を運び、山のように積み上げたり、その中に頭を入れたり寝てみたり、友達に頭から割箸をかけてもらったりするなど、全身で材料の質感や量感を味わう様子が見られた。

活動後の子どもの充実した表情から、造形遊びは子どもの奥底に眠る「こうしたい」という表現の原動力を喚起するものであることが改めて確認できた。また、教師は「あらゆる表現がその子らしさである」という柔軟な視点を持ち、子どもと共に授業を展開し、その子らしさを見つけ伸ばしていくことが重要であると考えた。



図 1 当日配付資料と講演要約



図 2 授業Ⅰの様子

（2）授業Ⅱ 斉藤洋介（横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校）

授業Ⅱは、緩衝材を使った活動である。冒頭に「これどこかで見たことがあるか」を児童に問いかけたところ、「カニと一緒に入っていた」との予想外の発言から活動が始まった。普段は目に留まらない日常の中の豊かな材に気づいてほしいという意図のもと、児童は緩衝材とじっくり向き合った。活動は一人一つの材から始まり、児童は名前を付けることで愛着を持ち、見立てによって机上で物語を展開していった。次第に緩衝材の数を増やすことで表現は広がり、物語は変化し、活動はよりダイナミックになった。最終的には用意したすべての緩衝材を開放し、児童は身体全体でその質感や量感を味わった。

この実践から、造形遊びにおいては材だけでなく環境も大きく活動に影響を及ぼすことが確認された。同じコーヒ一豆でも挽き方や淹れ方、器や場所によって味わいが変わるように、造形遊びも環境との関係性によって豊かさが生



図 3 授業Ⅱの様子

まれる。大人もまたその中で自己の表現を探っているのであり、子どもにとっても自らの表現を探る造形遊びを大切にしていく必要がある。

（３）造形遊びの歴史から—現代日本の教育改革と造形遊び— 村田透（滋賀大学）

図画工作科の学習内容の一つである造形遊びは、昭和 52 年改訂の学習指導要領において低学年対象として導入され、平成元年改訂では低・中学年対象、平成 10 年改訂では全学年対象となり現在に至る。図画工作科への造形遊びの導入・展開は、日本の教育改革と連動している。農業社会から産業社会への転換、さらに産業社会から知識基盤社会への転換という世界的な動きの中で、日本の教育改革は、知識の詰め込みという「記憶中心」の教育から、学力の三要素（基礎的基本的な知識・技能の習得、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に特組む態度）を一体的に育む「生きる力」の実現を目指している。教育改革と関連づけて造形遊びの意義や魅力を考えた場合、子ども一人一人が材料・用具や場所、友達や教師など思いのままに関わり、自分で目的をつくり試行錯誤や創意工夫を繰り返す個別的学习と協同的学习を通して、表現の喜びを味わいながら資質・能力を一体的に育む学習活動であるといえる。

（４）これからの造形遊びを考える 山野井誠（調布市立北ノ台小学校）

図工教育の核心は「子どもに委ねること」にあると考える。教師が答えを与えるのではなく、子ども自身が意味や価値を見いだすことこそが学びの本質である。造形遊びは、指示に従うのではなく、自由な試行錯誤を通じて日常に潜む造形性を発見する機会となる。コロナ禍を経験した子どもたちは、砂やボンド、新聞紙や鏡といった身近な素材を通じて独自の表現を広げており、その姿は教師に「見守り、伴走する存在」としての役割の重要性を示している。図工は、一斉授業に馴染みにくい子どもも受け止め、多様な学びを保障する力を持つ。今後の造形教育においては、平凡な日常に潜む造形的可能性を子どもと共に探り、その価値を教育現場で共有していくことが重要である。

（５）対話とディスカッション

授業者の河村泰正・斉藤洋介両氏、スピーカーの村田透・山野井誠両氏、さらにフロア・オンライン参加者を交えたディスカッションが行われた。テーマは「造形遊びの現状と課題、そして展望」であり、多角的な意見交換が展開された。会場で交わされた話題を整理して報告する。

【現場からの課題】

準備・理解の困難さ：材料や環境整備の負担、保護者理解の不足が障壁として挙げられた。

評価の難しさ：作品が残らない活動をどう見取り、共有するかが課題。

方法論の不在：造形遊びには決まった手順がないため、現場での実践に迷いが生じやすい。

【造形遊びの教育的意義について】

子ども主体の学び：教師が答えを与えるのではなく、子どもが素材と関わりながら意味や価値を見出すことが強調された。

情緒と関係性：造形遊びは単なる制作ではなく、心の動きや仲間との関わりを通じた学びを支える営みである。

「意味の更新」：子どもが日常の素材を通して見方や感じ方を繰り返し作り替える点が大きな特徴として確認された。

【小中接続への示唆】

小学校での造形遊びの体験は、中学校での技能学習の基盤となる。小・中の教員が互いの実践を共有し、9年間の学びの連続性を意識することで、技能と表現の双方を深化させることができるのではないかと。

【成果と今後の課題】

ディスカッションを通じ、造形遊びが子どもの主体性と情緒を育む教育活動であることが改めて確認することができた。一方で、今回の対話から大まかに分けると4点の課題が見えてきた。

- ① 保護者や社会への意義の発信
- ② 記録や評価の工夫
- ③ 教材・環境設定を共有できる実践者ネットワークの構築
- ④ 少子高齢化や学級規模の変化に対応した学校全体での支え合い

造形遊びは「子どもに委ねる学び」の象徴であり、教師にとっても自身の関わり方を問い直す契機となる。今回の議論は、造形遊びを教育課程の中でどう位置づけ、社会にその価値を広く伝えていくかを考える上で重要な一歩となった。

末筆ながら、本フォーラムにご登壇くださった先生方、ご参加くださいました皆様、そして開催の機会を与えてくださいました美術科教育学会に、心より御礼申し上げます。

戦後美術教育の歴史的検討―戦後美術教育は何であったのか

有田洋子（島根大学准教授） 金子一夫（茨城大学名誉教授）

2025 年 7 月 12 日(土)13:00～16:00 に、サクラアートミュージアムを会場に、サクラクレパス後援のもと、リサーチフォーラム in 大阪「戦後美術教育の歴史的検討―戦後美術教育は何であったのか」を実施した。

本年は戦後 80 年、昭和 100 年にあたる節目の年である。そして美術科教育学会は創立 50 周年を目前に控えている。未来は過去と現在を基礎としないと描けない。今後の美術教育を考えるため戦後美術教育史を解明しておく必要がある。

戦後の美術教育は、現在の美術教育の基盤であり、その解明は重要である。しかし戦後 80 年経ってもそれが何であったのか、美術教育界において未だ共通理解に至っていない。その要因は、美術教育界を覆うさまざまな通念にある。まず、昭和 20 年 8 月を歴史的起点として戦前とは全く違う新たな戦後美術教育が始まったとする通念がある。あるいはある美術教育事象に対する恣意的な通念もある。本フォーラムは、それらの通念を克服し、戦後美術教育は何であったのかを、参加者とともに冷静にかつ切実に検討することを企図して実施した。金子の基調提案のもと、検討の材料として美術教育学史、美術教育運動史、地方美術教育史、美術教育材料史の個別的研究成果を用意した。具体的には以下のとおりである。

□基調提案 金子一夫

本フォーラムは個別的研究成果の検討を通して、戦後美術教育史の前提を問うものである。その前提とは通念的戦後像である。昭和 20 年 8 月 15 日に歴史的断絶を見て、そこを歴史的絶対起点とするのが通念的戦後像である。歴史社会学の分野では 1980 年代に山之内靖が、戦後の社会は敗戦により突如もたらされたのではなく、現代社会の基礎の多くは、戦時動員体制において形成されたことをしてきた（『総力戦体制』2015 収録）。山之内、さらに見田宗介、大澤真幸の論を参照して、戦時と戦後を区分しない、戦時・戦後前期、戦後後期、現在という美術教育史の新たな時期区分を提示した。

□研究発表 1 「美術教育学史」 戦後美術教育学の制度基盤の形成過程 有田洋子

美術教育学の制度基盤の形成過程と危機を次のように概観した。第一期は師範学校の新制大学への移行の時期。第二期は学科目「美術科教育」、第三期は美術教育専攻大学院、第四期は教職大学院の全国整備の時期である。第一期から第三期にかけて制度整備と実質化(教官配置)が完成したのも束の間、第四期で制度的危機に至った。四期は基調の新時期区分とぴたりと一致した。見田や大澤の論と対照すると、理想や夢へ努力・邁進したが、それが夢幻の虚構になり、最後は不可能性すなわち理想も夢もなく現実へ逃避する状態となった。理想や夢＝学術研究の困難である。美術教育学研究の制度は脆弱化したので、今後は学会が支えると共に各人が誠実な研究を重ねる必要がある。危機の時代のあとは美術教育学再生あるいは新たな美術教育学出現の時代になるはずと思いたい。なお師範学校美術教員の複雑な意識と共に、実技中心の美術教育観は戦後へ継続し、のちまで尾を引いた。

□研究発表 2 「美術教育運動史」 戦後の民間美術教育運動―創造美育協会を中心に― 新井哲夫

本発表の目的は、戦後の民間美術教育運動に関わる歴史研究の現状と課題を、創造美育運動を例に明らかにすることである。これまでの解釈や評価を概観すると次の特色が見られる。①戦後の民間美術教育をめぐる解釈や評価はほぼ一貫しており、本質的な変化がみられない。②その一方で、時代が下れば下るほど、運動像のステレオタイプ化が進行し、恣意的な解釈・評価が拡大している。これらの原因は、運動の当事者の言説や運動を間近に見た人々の発言が検証されることなく引用・参照され続けてきたことにあると思われる。そうしたステレオタイプ化した運動像や恣意的な解釈・評価の上に戦後の美術教育像が形成されてきたとすれば、問題は民間美術教育運動にとどまらず、戦後の美術教育全体が虚偽の歴史解釈の上に構築されてきたことになる。本発表はそうした危機意識に基づく。従来の創造美育運動に対する解釈・評価の問題点とそれが生じた原因の考察を踏まえて、民間美術教育運動に関する歴史研究の課題を、史料の取り扱いの問題を中心に次のように整理した。(1)一次史料の重要性。(2)文献史料の多角的な検索・収集の必要性。(3)時間的経過を踏まえた史料分析の必要性。一言でいえば、歴史研究の基本的手続きを丁寧に踏むことである。

今日の美術教育が直面している課題の本質を可能な限り正確にとらえ、解決の緒を見出すためには、何よりもまず戦後美術教育に関する従来の歴史認識を見直すことが急務である。

□研究発表3〔地方美術教育史〕戦後地方美術教育団体の結成―秋田県における諸相― 長瀬達也

秋田県美術教育団体史については渡部景一（秋田県師範学校昭和8年卒）の先行研究がある。戦前に六葉会（昭和2年頃発足、後に秋田美育協会）や秋田県^{けいけい}図画教育研究会（昭和11年発足）があり、秋田県師範学校図画教員の大木善平（東京美術学校図画師範科大正13年卒・大正13年から昭和17年まで秋田県師範学校在職）に指導された師範学校卒業の小学校教員たちが運営していて、教員の展覧会や実技講習会などを開催している。なかでも竹内栄治郎は昭和2年頃に子どもの自主性や喜びを大切にするという考えを表明していた。昭和3年には山本鼎と後藤福次郎が「全県小学校児童作品展」審査員、及び「図画手工教育講演会」講師として来県して先進的な美術教育の考えを秋田県に伝えた。戦後は渡部たちが秋田県図工教育研究会（秋田県造形教育研究会の前身）を結成した。以上のように、戦後の秋田県図工教育研究会は出発時、戦前の大木の影響下にあった六葉会などの図画教育団体の思想や方向性を内包していた。戦前の秋田県師範学校卒業生を中心とする教員が戦後まで活躍し、そして実技を重視する美術（図画）教育観も維持されたと言える。本発表では渡部の先行研究を参考にしながらも、根拠資料が確認できた事象について報告している。

□研究発表4〔美術教育材料史〕材料的美術教育史の試み―戦後初期の不透明水彩絵具への転換― 金子一夫

1947年「アメリカ児童画展」に展示された米国児童作品の不透明水彩の色彩と筆致は日本の美術教育関係者に衝撃を与えた。同展はCIEのヘファナンが関与した日本教育改革運動の一環であった。日本の美術教育界は透明水彩から不透明水彩へ官民挙げて転換する。絵具製造会社は学童用不透明水彩絵具を研究開発し、文部省は1951年の学習指導要領で低学年から不透明水彩を使うと規定した。こうして日本の水彩絵具は不透明水彩中心になった。ただ現実には半透明水彩絵具であった。重色の透明水彩と混色一回塗りの不透明水彩の基本技法の違いが意識されなくなり、教育現場で混乱が続いている。正統的な不透明水彩を指導した松本キミ子と堀典子を紹介した。

□意見交換

以上の発表ののち、対面出席者及びオンライン参加者と意見交換を行った。「創造性」「創造力」に関する質問が多くあった。まずプラトンやシラーの創造概念を観念的と無視することはできない、それを無視することは産業主義なのではないかと意見があった。それに対して金子が理念を軽視するわけではないが、美術教育はもっと社会史といった実質的なものに基礎づけられるべきと考えたいと回答した。また金子の「供養としての美術教育史」という概念の内容に質問があった。それは過去を解決しないまま隠蔽すると、それは怨霊のよう立ち上がってくるので、きちんと歴史的意義を与えて鎮まってもらうことと回答された。

戦時の美術教育における創造性は戦後へ継続したという金子の基調提案について、戦時と戦後で創造性の質（内容）の違いについて質問があった。それに対して金子は戦時から戦後へ創造性は継続したが、創造性の内容が違う。戦時下は物が無いので創意工夫という意味で創造性が言われ、戦後は観念的スローガンとして創造性が謳われた。戦時下に高度化した教育内容は、占領下にCIEの指導もあって抑えられたとした。さらに、創美における創造力の質に対する質問・意見もあり、それに対して新井が創美における創造力はいわゆる理想主義的な創造力であったと総括した。また戦前の児童画のコレクションの状況について質問があった。学校は昔から火事が多くて、火事があった場合は焼失している。それでも、地方には児童作品を大事に保存している学校があり、研究がされつつあることが伝えられた。

サクラアートミュージアムの清水靖子氏から、画材メーカーは企業とはいえ、利益中心ではなく美術教育への貢献のため尽力している。画材の特質や使用法といった基本的な事項について、教員養成大学・学部で授業で丁寧に教えてほしいという話があった。最後に美術科教育学会美術教育史研究部会代表の赤木里香子氏より総括のコメントを頂戴した。清水氏と赤木氏のコメントから美術も教育も研究も純粋贈与であることをあらためて感じた。

オンラインは以上で終了し、その後は対面参加者で1時間程度意見交換を行った。美術教育における実技優位の意識や、美術教育及び美術教育者を低くみるのが今も続いている。美術専門大学・学部で教職課程をとる者は多いものの教員になることを望んでいる者は極僅か等が語られた。そのまま参加者全員で懇親会へと進み、さまざまな意見交換がなされた。

花篤實氏と西村四郎氏に臨席していただけたなら、さらに快活闊達な会となったことと思う。天から語りかけられる、実際はこうだったよという両氏のお言葉とお顔を想像してやまない。

対面では24名、オンラインでは37名の方にご参加いただきました。皆様に深く御礼申し上げます。

サクラクレパスより『サクラクレパスとクレパス―美しい色を求めて百年の物語―』（2025年4月）を参加者に全員頂戴いたしました。

書評 Book Review

著者：永守基樹，発行：2022 年度美術科教育学会リサーチフォーラム in 東京・弘前事務局，2025 年 10 月発行

造形遊びの再布置化に向けて：基礎教育の視点から美術教育課程を構想する

北野諒（高知大学）

1. はじめに

怪物的な論考である。学術の場で過剰な修辞は慎むべきであることは承知しているが、怪物的、としか形容のしようがない。本書は、永守基樹氏（和歌山大学名誉教授 / 以下、敬称略）が、【2022 年度 美術科教育学会リサーチフォーラム in 東京・弘前 共に考える 2030 年代の美術科教育における『造形遊び』の意義】にて行った講演のトランスクリプトをベースとして、大幅な加筆修正を施して構成したものである。なお、本稿執筆時点で本書を起点とした【2025 年度 美術科教育学会リサーチフォーラム in 大阪2 造形遊びの再布置化に向けて】も、筆者（北野）と清家颯氏（東京学芸大学）がコーディネーターとなって企画されている。

本書で永守は、造形遊びを 21 世紀における美術教育の基礎教育課程に位置づけなおす（再布置化する）ために、およそ考えうる限りのトピックとリファレンスを渉猟し、30 万字に迫るボリュームで縦横無尽に語り尽くしている。造形遊びを巡る批評的な論考としては、西野範夫氏による『美育文化』での長期連載「子どもたちがつくる学校と教育」以外には類例がないサイズとなっており、書評の限られた紙幅で、その全体像を遺漏なく紹介することは叶わない。あくまでも筆者（北野）による大鈞を振るった要約・評言であることを断りつつ、高密度に議論が輻輳する本書を読解するための手懸りを、わずかでも記すことを試みたい。

2. 本書の構成

- 1 章 造形遊びの登場とその前史
- 2 章 造形遊び登場からの半世紀に見る問題群
- 3 章 「遊び」を解きほぐす：教育課程から逃走する「遊び」
- 4 章 「子ども」を解きほぐす
- 5 章 アートと教育の政治化のなかで美術教育とその基礎を構想する
- 6 章 閉ざされた基礎造形教育を開くために
- 7 章 造形遊びの再布置化のかたちを基礎造形教育の系譜から探る
- 8 章 同時代美術と美術教育の照応：20 世紀後半前衛美術が美術教育にもたらしたもの
- 9 章 造形遊びをめぐる「過去・現在・未来」：造形遊びは「いま」に閉ざされた学びか？
- 10 章 造形遊びの再布置化を構想するために

まず大前提として、本書全体を貫く命題は「造形遊びは図画工作科・美術科教育の『基礎教育』として教育課程に位置づけられるべきである」というもので、それ自体はシンプルである。しかし「基礎教育」がカッコに括られていることから察せられるように、永守は登場するキーワードや鍵概念を自明視せず、語の出自や歴史的背景を洗いざらい問い直していく。その徹底的な文脈読解によって、簡にして要を得た主張から 30 万字もの記述が生成されることになるのだ。以下、各章ごとに議論の大局的なストーリーを追っていく。

1・2 章では造形遊びの来歴・現状を確認し、その問題点を別決することが試みられる。永守は造形遊びをモダニズム美術教育の最終形態であると指定し、その誕生の正当性を認めながらも、教育改革の動向のなかでそれが棄損されていったのではないかと診断する。当初は / 本来は「汎領域的な基礎教育」であったはずの造形遊びに、「教科の柱」「教科全体の理念・方法」といった性格が付与されたことで、その位置づけが決定的に曖昧になったと永守は考えている。ここは本書全体の足場となる、造形遊び（と戦後美術教育）についての謂わば「永守史観」が示されるパートであり、論者によって見解が異なりやすい部分にもなるだろう。議論の過程では「意味生成」批判も行われるなど、スリリングな展開がある。勘所として精読されたい。

3・4 章では、造形遊びの重要な構成要素である「遊び」と「子ども」について、「解きほぐす」という章題が示唆するように、脱構築的な考察がなされる。たとえば「遊び」においては、その「教え」との緊張関係があらためて検討され、還元・中断という様態に照明が当てられる。あるいは「子ども」においては、造形遊びが素

朴な教育学的子ども把握に留まっていることが明るみにされる。そしていずれも、暗黙の前提が孕む問題の指摘（脱構築）だけには留まらず、「形式面の革新にこそ、芸術教育の本質がある」こと、「造形遊びでの学びから大人の造形世界への道筋を示す」ことなど、重要な主張（再構築）が行われる。本章までで、「来し方」から「行く末」へ（歴史と文脈を振り返り未来の展望を描く）、「脱構築」から「再構築」へ（暗黙の前提を揺るがし包括的な解釈を導く）という永守論考の基本的な戦略を理解することができるだろう。

5章では、本稿の重心的な主題である「汎領域的な基礎教育としての造形遊び」と対を成す、「総合・応用教育としてのメタ・メディア / メタ・コミュニケーション」が論じられる。基礎教育のかたちを明視するためには、目指すべき総合・応用教育との照応が必要である、というわけだ。1990年代以降のアートと教育の政治化を追っていくなかで、永守はメディア・アートと参加型アートに次世代の美術教育のヴィジョンを見出し、「メタ次元でメディアとコミュニケーションを問い直し、その創造的変革を目指す」ことをその価値の中心として析出する。筆者（北野）なりに換言すれば、「つくり、つくりかえ、つくる」造形遊びに対して、「つくることをつくる」のがメタ・メディア / メタ・コミュニケーション、ということになるだろうと思う。

6章では、新たな総合・応用の観点から造形遊びを見直すことが試みられる。造形遊びは「身体感覚でモノ・場所・空間に出会う」活動であり、直接的（im - mediate）、つまり媒介（メディア）無しに行われるものである。その「反・メディア」的特性（閉ざされ）を開くためのヒントが、メルロー＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty）の身体論や、カール・ロジャーズ（Carl Ransom Rogers）のコミュニケーション論に求められる。身体の共振や、共感性への信によって、どのように造形遊びの閉ざされを開くかという議論は、造形遊びの相互行為分析などの実態解明型の研究にも、深いレベルで理論的な示唆を与えるものになっているのではないだろうか。

本書は、永守自身が冒頭で明言している通り、具体的な教育課程の設計には踏み込んでいない。しかし7章では、そのヒントとなるような構想の端緒が示され、「基礎教育」「基本教育」「総合・応用教育」の三層構造が、原型的なモデルとして論じられている。そこから、基礎造形教育のロールモデルとしてバウハウスが議論の俎上にのせられる。本書においてバウハウスは、単なる教育プログラムの先行事例としてのみならず、美術と教育のブリッジを多様な仕方ですす最重要のモチーフとして、特に7章以降、繰り返し参照されることになる。造形遊びを、構成教育の系譜のもとにある、汎領域的な基礎教育として捉える永守は、その祖型を尋ねるなかで「身体」と「感覚」という近代美術（教育）のコアに辿り着き、基礎造形教育を「還元」と「構成」の往還として捉えるに至る。そこから永守は、戦後構成教育において空洞化していた「還元」の側面を補うかたちで、造形遊びが登場したと言えるのではないかと、という見立てを導出している。

8章では、「還元」を美術の方法・価値体系として跡づけるために、1960-70年代美術の分析が行われる。近現代美術をメディアム（表現の媒体とそこから規定される表現の形式）の純化の過程（≒還元のプロセス）とするならば、その極点には「零下の地平（sub-zero horizon）」が見出されると永守は言う。表現の制度や形式のリセット（ゼロ地点）を超えて、それ以前の物質・物体・行為・身体にまで還元された地平が、造形遊びの本質的な価値や学びを支える基盤になりうるのではないかと、いうわけである。造形遊びを美術史上の動向とは切り離して捉える向きがあることは筆者（北野）も承知しているが、章末に記された、李禹煥氏の言葉を引いて造形遊びを語る一節などからは、両者の相補的な関係がありありと浮かび上がってくるように思われる。

9章では、1970-80年代の斯界における諸動向を振り返りながら、造形遊びに潜在する歴史性を再検討することが行われ、「前衛美術型」（美学・美術論的で教育の内容面を重視する傾向）と「ワークショップ型」（教育学・子ども論的で教育の方法面を重視する傾向）に造形遊びのタイプを区分して捉えたうえで、両者の対話的關係の重要性が唱えられる。——のだがしかし、本章からは議論も佳境に入り、文脈の交錯と複線的な考察がどこまでも加速していく。分量も9章と10章のみで本書の40%に達する頁数となっており、もはや圧縮的な整理は到底不可能である。ここでは取り上げきれない無数の刺激的な論点が散りばめられている。1～8章までに概説した議論のフレームワークをもとに、ぜひ自身でテキストに分け入っていただければ幸いだ。

さて、10章では……という要約は、もう止めにしておこう。章題に示されている通り、ここまでの理路をふまえて最後にあらためて「再布置化」に向かうわけだが、導きの糸として幼児造形教育が召喚され、未分化性の二つの側面——未来の専門への分化を予見する「未専門」と、現前する子どもの未分化な状態を直視する「未差異」——が示されるなど、さらなる新たな参照項が結末の直前まで編み込まれ続ける。総合・応用教育における「総合」と「メタ」の差異を論じるなど、終幕を前にしてクリティカルな論点が滑り込んでくる。その筆勢には脱帽するしかなく、これ以上、ここで駆け足の半端な解説を重ねることは控えておきたい。

個人的には、本書を永守による檄文として受け取っている。脳が灼けるような読後感と共に、私たちはこのあと新しいページに何を書くことができるのかと、自問させられる文章であるだろう。本書が媒質（medium）となって、新しい「遊び」が創発されることを願っている。

リサーチフォーラム in 大阪2 案内

Notice of the Research Forum in Osaka 2

造形遊びの再布置化に向けて

北野諒（高知大学・講師） 清家颯（東京学芸大学・特任講師）

1. 趣旨

造形遊びはいま、迷子になっている。【いま、ここ】での遊びに夢中になるあまり、来た道と往く先と還る場所を見失い途方にくれている——このように書くと、いささか論争的に過ぎるだろうか。

モダニズム美術教育の最終形態である造形遊びが登場してから間もなく半世紀。斯学における実践と研究の重心的なテーマであり続ける造形遊びは、時代を経てなお、その意味と価値を新たにしている。探求的な学び、問題発見・解決のプロセス、対話と協働……造形遊びは現代の学習観を先見していたかのようですらある。

しかしそこには、【いま、ここ】への閉ざされという陥穽があるのではないか。学習者中心主義の過剰なドライブは、造形遊びの全てを子どもの本性に帰すことにつながり、その歴史性、美術文化との接続、諸理論・思想との連関、教への可能性、方法論の体系化、カリキュラム論からの検討、等々を恣意的に不問にしてきたのではあるまいか。【いま、ここ】での遊びと学びへ全人的に没入する造形遊びは、時間の潮だまりのなかで「ほんとうの子どもの姿」や「普遍的な創造のよろこび」を仮構し、永く微睡んできたのかもしれない。

本フォーラムでは造形遊びを歴史意識のなかに開いていくために、永守基樹氏による論考『造形遊びの再布置化に向けて：基礎教育の視点から美術教育課程を構想する』を基盤としながら、各登壇者による批評的な応答を用意する。氏の論考に対する美術教育史的観点および美術教育思想史的観点からのレビュー（第Ⅰ部）と、再布置化に向けた実践的提案（第Ⅱ部）によって、ともすれば理念の対立に行き着きかねない造形遊びという巨大なテーマを解きほぐし、参加者と共に迷路の出口を探す機会としたい。

* 本フォーラムは、金子一夫氏企画・前期リサーチフォーラム（2025年7月12日 同会場で開催）と“戦後美術教育”を結節環とした連動企画である。

2. 登壇者と発表題目

【基調提案】

永守基樹（和歌山大学名誉教授） 「造形遊びの再布置化に向けて」

* 基調提案のベースとなる論考は学会 web および下記 Peatix に掲載します。

【第Ⅰ部】

金子一夫（茨城大学名誉教授・特命研究員） 「美術教育史的観点からの批評」

清家颯（東京学芸大学特任講師） 「美術教育思想史的観点からの批評」

【第Ⅱ部】

鷹木朗（京都芸術大学特任教授） 「60－70年代アートの題材化・実践事例：造形遊びの再構成」

北野諒（高知大学講師） 「参加型アートの題材化・実践事例：造形遊びの拡張」

菊地虹（立教大学博士後期課程） 「ABR とリフレクション：造形遊びの新たな学習モデル」

* 各部にて登壇者間でのディスカッションを行い、適宜、会場も交えた意見交換の機会を設けます。

■日時 2025年12月20日（土）13：00～17：30 （zoom による同時配信を行います）

* 当日配信の技術サポートとして辻大地氏（子どもアートスタジオ主宰）にご協力いただきます。

■会場 サクラクレパス本社 4F 研修室 （大阪市中央区森ノ宮中央1-6-20）

■参加費・定員 無料・会場参加50名まで （会場にて永守氏の論考および発表概要集の印刷版を配布します）

■問い合わせ先 ryokitano@kochi-u.ac.jp （北野諒・高知大学）

■申し込み方法

参加種別にご留意のうえ、下記の Peatix から **12/12（金）23:59 まで** に申し込んでください。

【会場参加用】 <https://peatix.com/event/4543155/view>

【配信参加用】 <https://peatix.com/event/4543186/view>

リサーチフォーラム in 青森 案内

Notice of the Research Forum in Aomori

《教育版画連続3回セミナー》虹の上をとんだ船の「それから」の軌跡

佐藤絵里子（弘前大学准教授）

本セミナーでは、教育版画を通して〈わたしたち〉の生に形を与えようとした／する子どもの姿をもとに、自立共生性（コンヴィヴィアリティ）や領域横断性に関する対話を行います。その際、過去の出来事の連続線上に新しい線を加えながら軌跡を描きだそうとするダイナミズム重視します。1974年、八戸市立湊中学校養護学級の生徒によって共同版画『虹の上をとんだ船はどんなことになったか』は制作されました。それは、前年から同校生徒が着手していた『虹の上をとぶ船』シリーズに描かれた理想に向かって飛び立った船が、公害、戦争、原子力などの現実と直面する物語でした。50年後の今、わたしたちの行く手にはどのような問いが待ち受けているのでしょうか。（第1回は、2025年9月27日に終了しました。）



第2回お申し込み
(Peatix)

1. 【第2回】版と記憶——大地のあいだを伝播していく船旅

- ◆ 日時：2025年12月13日（土）13:00～16:30
- ◆ 会場：弘前大学文京町キャンパス教育学部校舎1階大教室（対面+zoomによる開催）

【発表者と発表題目】※敬称略

「生活綴方と教育版画——教育学・教育社会学の視点から」
「青森市と米国メイン州との小学生版画交流作品展について」
「版画教育から教育版画へ——その思想と技術を受け継いで」
「語りと児童作品紹介」
「語り + 一人芝居『海村』より抜粋」

福島裕敏（弘前大学教育学部教授）
鈴木唯司（公益財団法人鷹揚郷理事長）
藤田敏幸（元つがる市立車力小学校校長）
井上則秋（平川市立金田小学校教諭）
梶谷伸夫（八戸市公民館館長／企画事業アドバイザー）

2. 【第3回】種のゆくえ——教育版木のこれまでとこれから

- ◆ 日時：2026年2月21日（土）13:00～16:30
- ◆ 会場：弘前大学文京町キャンパス50周年記念館岩木ホール（対面+zoomによる開催）



第3回お申し込み
(Peatix)

【発表者と発表題目】※敬称略

「郷土を見つめて表現する——『風のなかを飛ぶ種子 青森の教育版画』展を開催して」
高橋麻衣（八戸市美術館学芸員）
「旧嘉瀬小学校跡地で保管されている大田耕土旧蔵資料の来歴や状態、今後の活用方針について」
江戸邦之（五所川原市教育委員会社会教育課主査）
「地域に学び、平和を刻む教育版画の『いま』——県立美術館『コスモスの咲くとき』展の渦中にて」
奥脇嵩大（青森県立美術館学芸員）
「大田耕土の戦争と平和——従軍経験と那須の教育版画の展開に着目して」
作間亮哉（那須歴史探報館学芸員）

3. 開催概要

- ◆ 参加費：無料
- ◆ 申し込み方法：「美術科教育学会>リサーチフォーラム」に掲載のPeatixのリンク、もしくは上記QRコードからお願いします。
- ◆ 主催：弘前大学教育学部附属次世代ウェルビーイング研究センター
- ◆ 後援：成城大学グローバル研究センター
- ◆ この企画は、令和7年度大学コンソーシアム学都ひろさき活性化支援事業費補助金対象事業です。
- ◆ お問合せ：弘前大学教育学部 佐藤絵里子 eriko0220@hirosaki-u.ac.jp

■ 2025 会計年度までの会費納入をお願いします

「2025 会計年度会費」は、2025 年 7 月末日までに納入いただくようお願いしています。3 月の大会、リサーチフォーラム、学会誌刊行などの学会運営は、会員の皆様の会費により運営されています。ご自分の各年度の年会費納入状況については、以下の「会員 情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。

<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE>

なお、納入状況に疑問がある場合には、下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

＜留意事項＞ 学会誌への投稿並びに大会での口頭発表に際しては、投稿や申込みの時点で以下の 2 つの条件を満たしている必要があります。

- ① 会員登録をしていること。
- ② 当該年度までの年会費を全て納入済みであること。
* 会費を 2 年間滞納した場合は、会員資格を失います。

【会費納入に関するお問い合わせ先】

(株)ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津君子
[窓口アドレス] g030aee-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 会費振り込み口座名・番号

会員の皆様に送付される振込用紙、郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

- ・銀行名： ゆうちょ銀行
- ・口座記号番号： 00140-9-551193
- ・口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には、「2025 会計年度会費」等、会費の年度および会員 ID 番号を記入してください。また、ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は、下記内容を指定してください。

- ・店名(店番)： 〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)
- ・預金種目： 当座 ・口座番号： 0551193

年会費のクレジットカード決済サービスを開始しました！

- ・決済手数料は学会が負担いたします
- ・学会 WEB サイト (<https://www.artedu.jp/jaaed>) から決済画面に移動することができます
- ・従来どおり郵便局の払込用紙を使用した納入もできます

詳細は、本学会通信の 6 ページをご参照ください。

■ 住所・所属等変更、退会手続き

住所、所属先等に変更のあった方は、すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。

退会を希望される場合は、電子メールではなく、必ず文書(退会希望日を明記してください)を郵送にて、本部事務局支局宛にお送りください。あわせて、在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

【住所・所属等変更、退会手続きに関する連絡先】

美術科教育学会 本部事務局支局
〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2 丁目 39-2-401
(株)ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津君子
[窓口アドレス] g030aee-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 学生会員移行申請について

既に美術科教育学会の会員で、学生会員への資格変更を申請される方は、学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> のメニュー「JAAEd 会員 > 入会」より「学生移行申請」書類をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ本部事務局支局宛に郵送してください。

＜学生会員について＞ 学部・大学院の正規課程に在籍する学生が対象で、在職の有無は問いません。ただし、聴講生、研究生、科目等履修生は対象外となります。

■ 新入会員

2025 年 3 月 21 日の第 2 回理事会以降、2025 年 8 月 20 日までに入会申込書が受理され、第 1 回理事会で入会が承認された方々は下記の通りです(学生会員を含む)。

松本 浩司・小尾 麻希子・南陽 慶子・田中 美貴
楨原 れいか・斉藤 健・伊東 一誉・目黒 浩志・町野 紗恭
大澤 和美・楊 榛・李 佳蔓・庾 伝欣・青柳 万葉
中村 志映・高橋 慶

■ 学会通信(佐藤絵里子)

年間 3 回の刊行(6 月、10 月、2 月頃)を予定しています。紙面には、学会からのお知らせのほか、会員の皆様からの原稿を随時掲載します。寄稿のご希望があれば、発行日の 2 か月前までにお知らせください。

■ リサーチフォーラム(大泉義一)

リサーチフォーラムは学会主催として、研究発表・シンポジウムを実施する場です。募集等詳しくは学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> のメニュー「リサーチフォーラム」をご覧ください。

■ 学会ウェブサイト(手塚千尋)

美術科教育学会ウェブサイト <http://www.artedu.jp/> には、随時、学会からのお知らせを掲載しています。研究会の開催告知等の掲載を希望される場合は、本部事務局までお知らせください。

■ 一斉配信メール

年 3 回刊行される学会通信が公開された際に一斉配信メールにてお知らせします。g030aee-galileo@ml.gakkai.ne.jp より配信しますので、受信できるよう設定を再確認いただきますようお願いいたします。また、必要に応じて学会通信ではカバーできない案内をお伝えしていきます。一斉配信メールは、状況に合わせて柔軟に配信します。

美術科教育学会 本部事務局

Secretary Office

Japanese Association of Art Education



■〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1 大阪教育大学

佐藤賢司（代表理事/教科教育学コンソーシアム理事） ksato@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

渡邊美香（本部事務局理事/会員名簿） mwatanab@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

■〒630-8528 奈良県奈良市高畑町 奈良教育大学

竹内晋平（総務担当副代表理事/本部事務局長/庶務・会計・規約） shimpei@cc.nara-edu.ac.jp

■〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学

内田裕子（本部事務局理事/会計・会費管理） yuchida@mail.saitama-u.ac.jp

■〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37 明治学院大学

手塚千尋（本部事務局理事/学会ウェブサイト） tetsuka@psy.meijigakuin.ac.jp

■〒036-8560 青森県弘前市文京町1 弘前大学

佐藤絵里子（本部事務局理事/学会通信） eriko0220@hirosaki-u.ac.jp

■〒739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1 広島大学

池田吏志（研究担当副代表理事/学会誌編集委員長） ikedas@hiroshima-u.ac.jp

■〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1 早稲田大学

大泉義一（事業担当副代表理事/リサーチフォーラム統括/8団体連携会議） oizumi@waseda.jp

□美術科教育学会 本部事務局 支局

■（株）ガリレオ(<https://www.galileo.co.jp/>) 学会業務情報化センター

〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401

（担当者 和久津君子） TEL 03-5981-9824 FAX 03-5981-9852 E-mail g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp